

キリスト教と近代規律 —タイ山地民ラフにおける時間秩序の変容—

西本 陽一[†]

[†] 金沢大学人間科学系 〒920-1192 金沢市角間町

E-mail: [†] yoichi@staff.kanazawa-u.ac.jp

要旨

宗教は、個人が自由意志で選択する内面的な信仰であるよりも、人々が意識せずに繰り返す習俗や慣習と捉えられるべき場合もある。西洋人による非西洋世界へのキリスト教伝道は、宗教的な教えの伝達であるとともに、西洋近代的な生活秩序や規律を非西洋人の人々に刷り込んでゆく制度あるいは装置という側面をもつ。本稿は、北タイ山地民ラフのキリスト教徒と伝統宗教派集団における時間秩序を比較し、バプテスト派キリスト教が少数民族ラフの生活秩序や規律のあり方に与えた変化について検討する。

キーワード： キリスト教、改宗、規律、ラフ族、タイ

1. はじめに

宗教は、個人がその自由意志で選択する内面的な信仰であるとは限らない。宗教はしばしば、普遍的な真理についての形而上学的・哲学的な教えのみによって成り立つのではなく、むしろ人々がその意味を反省してみる以前に繰り返している習俗や慣習としての側面を強くもつ (Kammerer 1990, 1996)。

キリスト教は西洋のものと見做されたり、西洋の文化や価値観を代表するものとして捉えられることが多いが、もともと非西洋起源である。しかしキリスト教は、現在では非西洋を含む世界各地のさまざまな民族や階層の間に広がっており、特に、西洋人による非西洋世界への伝道によるものである場合には、キリスト教は宗教的な教えであると同時に、西洋近代の規律を非西洋人の人々に刷り込んでゆく制度あるいは装置という側面をもつ (Comaroff 1985)。

本稿が対象とするタイ北部に暮らす山地民ラフ (Lahu) においては、現在人口の少なくとも五分の一がキリスト教徒であり、またキリスト教はラフのあいだで百年以上の長い歴史をもっている¹。長い歴史を経てキリスト教はキリスト教徒ラフの生活に深く根付いているように見え、態度や形式性において、ラフのキリスト教徒と伝統派とは、一見して分かる顕著な差異を示している (Walker 1975: 151, Matisoff 1988: 10)。改宗に際しても、ラフの場合には個人の選択によるものは稀で、大部分が指導者に従った集団的な改宗である (Telford 1937: 95-96, McGilvary 1912: 324)。このように、タイ北部の山地民ラフにおいても、キリスト教は単に宗教的な教えであるだけでなく、人々の態度や規律にまで影響を及ぼす制度ないし装置として作用しているよ

うに見える。

キリスト教の西洋近代の規律を刷りこむ装置という側面は、ラフにおいてさまざまな局面で示されるが、特に時間の秩序づけ方は、それが顕著に顕れる具体例である。本稿ではこの時間認識の変容について、現在のキリスト教徒ラフおよび伝統派ラフにおける時間と暦の秩序づけのやり方の違いを比較し、キリスト教の経験がキリスト教徒ラフの時間認識の変容をもたらした主要な社会的な力であったと示唆したい。本稿の記述は、タイ北部の伝統派ラフ村落とキリスト教徒ラフ村落で、それぞれ 1999 年 5 月から 2002 年 2 月と 1996 年 12 月から 1996 年 8 月までに実施した筆者のフィールドワークに依拠している。以下で見るように、現在キリスト教徒ラフと伝統派ラフの時間を秩序づけるやり方は、興味深い対照を示している。

2. 伝統派ラフにおける時間

伝統派ラフの生活において、一日の中の時間の分類の一番基本的なものは太陽光線照射の違いによる生活空間の明るさによる区分である²。「朝」(mvuh³ shaw⁻)、「昼」(mvuh³ law, k³aw³)、「夕暮れ、夜」(mvuh³ hpeu³)、「夜明け」(mvuh³ hti³ la, hta³) が一番大きな区分⁴である⁵。

より詳しい分類は「早朝」あるいは「朝の早い時間」(mvuh³ shaw⁻ na³, mvuh³ shaw⁻ te³ na³)、またより稀にしか聞かれない表現であるが、「深夜」(sheh³ k³aw hkui) という言い方が伝統派ラフおよびキリスト教徒ラフの両方において聞かれる。一方で、「正午、真昼」(sha g³u⁶) という表現がキリスト教徒ラフの間では「正午のご飯」(昼食) といった言い方で使われるが、伝統派ラフの間では聞かれない⁷。伝統派ラフにおいて一日の中の時間の経過は、太陽が出始めて「目が少し見え始めた頃」から、朝のだんだんと多くなってゆく太陽照射、午後の強い太陽照射、夕方から夜にかけての目がだんだん見えなくなりやがて暗くなる頃という具合に、太陽照射による周囲の明るさの緩やかな変化として認識されており、sha g³u⁶の含意するような「ちょうど正午」という観念は生活経験から遠いものである。

これよりも小さい区分は、「12 時に」(te³ chi nyi³ na³ li³ hta³)、「午後 1 時に」(bai mon hta⁸) などの、時計的な時間による一時間毎の区分である。しかし、この区分方法は、ものごとが村内のみに関わる時には殆ど用いられることはなく、タイ社会やキリスト教徒ラフを交えた会議などの外部社会との約束事に関わる場合だけに使用されるのが普通である。「時」と「分」を表すラフ語はそれぞれ na³ li³ と na³ hti というタイ語からの借用語である⁹。村外における賃金労働への依存度が大きい共同体では、雇い主に知らないうちに超過労働をさせられないように腕時計の着用が増えており、その場合には時間を個人の所有物だと捉える一時間単位や分単位での時間に対する意識が高くなる傾向がみられる¹⁰。「秒」に当たるラフ語はない¹¹。

一日を越える時間で伝統派ラフの生活を規則づけるものは、第一に月の満ち欠けに基づく暦である。新月 (ha pa che³ ve 「月が折れる／切れる」) と満月 (ha pa taw³ ve 「月が現れている」) は

伝統派ラフの「戒日」(shin[˥] nyi[˥])¹²)で、彼らの暦の中で一種の区切りのような日である。戒日には野良仕事、肉食、性行為などを控え、村外に出掛けたりせず、村の寺と家の祭壇に朝夕蠟燭を点して神(G[˥]ui, sha)に祈るべきだとされている¹³。伝統派ラフの戒日は、タイのカレンダーにおける休日と一致しない場合が多く、そのような場合、子供達の大部分は学校に行かない。伝統派ラフの暦とタイ人のそれとはリズムやテンポが異なり、タイ人による低地社会の価値観やコントロールが山地社会へ拡大した現在でも、タイ社会の時間秩序はいぜんとして多くの部分で、伝統派ラフの共同体の外側に存在する異質なものである。

戒日の翌日から次の戒日までの14日間または15日間は「ひと回り」(te[˥] jaw[˥])¹⁴)と呼ばれる。戒日が終わると「戒が終わって1日」(shin[˥] peu, te[˥] nyi)、戒が終わって2日」(shin[˥] peu, nyi[˥] nyi)というやり方で日々は数えられてゆき、戒日の前日である13日目または14日目は「戒の始まる日」(shin[˥] tan, nyi)と呼ばれる。「戒の始まる日」の夕方から人々は村の神殿と家の祭壇に蠟燭を点し始める¹⁵。

伝統派ラフの村人の多くは正確な日の経過は知らないが、月の満ち欠けの動きから、「月がまだ消えないので戒日までにはまだまだあるな」とか「月がだいぶなくなったのでそろそろ戒日が近いな」という具合に、おおよそのものを知る。実際にどの日が戒日になるかについては、現在では、村の大人のうちでアラビア数字によるカレンダーを読むことの出来るだけの簡単な識字技能のある者が、タイのカレンダーを見て知り他の人にも知らせている。タイのカレンダーには満月、新月、半月（これらが7～8日毎に訪れる上座仏教徒の「仏日」wan phra [標準タイ語]、「戒日」wan shin [北タイ語やシャン語]である)が示してある¹⁶。最近では、ラフ語で書かれたカレンダーが教会やNGOなどの組織によって作られて配られたり売られたりしているが¹⁷、その殆どがラフ語の識字技能を持たない伝統派ラフは、ローマ字によるラフ語表記ではなく、アラビア数字と図によってそれらを使っている¹⁸。戒日が近づくと、普段は畑の出作り小屋で生活している人の所にも、家に帰ってくるべき時間が近いという知らせが村から送られる。

伝統派ラフの人々は、昔は低地の北タイ人やマラリアなどの病を恐れて山の高いところで生活していたものだったと語る¹⁹。過去において、彼らが低地との交渉をもつのはときどき低地の町へ行き、唐辛子などを売り塩や米などを買って帰るとき、または逆に時折低地からの商人が山に登ってくる時だけだったという²⁰。実証データはないが、キリスト教徒ラフおよび伝統派ラフの人々の話と筆者の観察を総合すると、ミャンマーにおいてもタイにおいても、後者よりも前者の方が水田耕作に対して積極的で、標高のより低い場所に暮らす傾向があったようである²¹。このような態度の違いは、キリスト教会が取っていたアヘン栽培禁止（アヘンは普通海拔標高千メートル以上の涼しい耕地で栽培される）、公的教育の促進、焼畑移動耕作から定住耕作への転換などの政策と関係があると考えられる。キリスト教徒ラフの方が伝統派ラフよりも、物理的にも概念的にも低地との距離が近くなるのが早かったといえる²²。

筆者のキリスト教徒ラフの調査村の大人達の多くが、中途退学したとはいえ学校に通った経験があり、また村内の教会が行う日曜学校に行ったことがあるのに対して、伝統派ラフ調査村では、20 歳以上の者でまともに学校に行ったことのある者はいなかった。このことは例えば、アラビア数字を（書けなくとも）読めることなどの基本的な識字技能における差異としてあらわれている。

伝統派ラフが、いつ頃からタイのカレンダーを使用するようになったか正確なところは分らないが、筆者の調査村では早い家では少なくとも 3 世代前には使用されていた。ミャンマーの伝統派ラフ（赤ラフ）は、タイ系民族のひとつであるシャン族のカレンダーを同様に使用しているという。人々の推量を含めた記憶によると、カレンダーを用いる以前に村人は、月のだいたいの形からそろそろ戒日が近いことを知ったが、具体的にどの日に安息するべきかは、最終的には村の村長や長老の判断に従ったということだった。彼ら自身が認めているように、当然村毎に戒日がずれることがあった²³。カレンダーの普及した今でも、伝統派ラフの間の戒日は、カレンダーの表示によって厳格に規定されているのではなく、いぜんとして一種の柔軟さを残している²⁴。

新月の翌日から満月、そして満月の翌日からふたたび新月までの「ふた回り」で「ひと月」(te`ha pa) である。しかし、「月」(ha pa) のそれぞれに名称がある訳ではなく、月が満ちたり欠けてなくなったりすることによって「ひと回り」の経過は認識されても、「ひと回り」がふたつ経過したときに「ひと月」が過ぎたと認識されることは比較的少ない²⁵。「ひと回り」の中での時間の経過が、月の満ち欠けの動きとほぼ対応する日々の経過（それらはまた前の「戒日」からの距離および次の「戒日」までの距離として言及される）によって認識されているのに対して、一年の中での時間の経過が、「月」の経過によって認識されることは少ない。一年の中で「月」が重要になるのは殆ど唯一、重要な年中行事である「カオシーン」と「オッシーン」が催されるふたつの月とその間に挟まれたひと月のみと言ってよく、この 3 ヶ月間には婚礼等は避けられる傾向がある²⁶。代わりに「寒い時間」(mvuh`ka`yan`), 「雨の時間」(mvuh`ye, hkui[yan`]), 「日射の時間」(mi`cha hkui)（あるいは「乾いた時間」mvuh`go`yan`と呼ばれる）という 3 つの季節の移り変わりおよび農作業、草木の種類、年中行事²⁷の変化を通して、一年の中での時間の経過が認識される²⁸。正月祭、焼畑の播種、収穫、新米祭など主要な年中行事が再びやって来ると、人々は前年の同じ行事の頃を思い出して一年 (te`hk`aw,) が再び巡ってきたことを感じる。特に正月祭 (hk`aw, ca`ve, 字義は「年を食べる」) は旧年の終わりと新しい始まりを強く感じさせる行事である。しかし再び正月祭が巡ってきたことによって「月」が 12 個過ぎたのだとは感じていない。正月祭が行われる時期には村毎に差がある。8 日から 14 日程にわたる（長さにも村毎に差がある）正月祭の期日は、「正月日」(hk`aw, suh`nyi) が自分の「ひと回り」の初めの数日目であり、かつ十二支による吉凶日判断で「よい日」に当たるように²⁹、そして「正月祭の明ける日」(hk`aw, taw`-e ve) が同様に「よい日」であるように勘案しながら決められる。そ

して基準となる新月も地域や村毎に異なり、一番早く始まる正月祭と一番遅いものとの間には2ヶ月以上の差が出来ることになる³⁰。正月祭が行なわれる期間は地域や村毎に異なり統一されていない。

「年」(hk'aw₁)というラフ語は、動詞hk'aw₁ ve(「戻る」、「戻す」、「取り戻す」という意味)と語源を同じくし、1年のサイクルの中で「年」が戻ってきているという含意がある(Matisoff 1988: 310)。年には、「鼠年」(fa^hhk'aw₁)、「猿年」(maw₁hk'aw₁)という具合に、それぞれ十二支による動物が付けられているが、後述の「日」につけられた十二支と比べると、ある特定の年がその十二支名によってよい年であるか悪い年であるかということが議論されることは少ない³¹。人々の多くは今年が十二支で何の年に当たるかを知っているが、自分の生年が十二支において何年であるかを知っているのは年長者のうちでも一部である。このような人々でも、自分の生年から現在の歳を知ることは出来ないし、年男や厄年という観念も見られない。しかし、十二支による生年が分かっていたらそれから年齢を計算することができるということは多くの人が知っていて、筆者が十二支の生年について尋ねると、彼らは筆者が自分達の現在の年齢を割り出すために聞いているのだと即座に理解し、多くの者が、「アカのところに行けば分かる」、「アカは年を割り出すのに長けている」という答えを返してきたものであった³²。一方、ある年から12年経って同じ十二支名の年がやって来ても、時が一巡したという観念を抱く人は殆どいない様子であった。線的な流れとしての時間観念と循環的な時間観念とは重層しながら存在しているが、それらの度合いとしては、時間は流れて過ぎてゆくというよりもむしろ、一年が過ぎるとまた同じ季節がやってきたと人々は感じているのである。

タイ人やキリスト教徒ラフ人との交流が以前よりも多くなった現在、仏暦や西暦による年の表示を知らない者は伝統派ラフにも少ない³³。しかし、これらの使用は外部者との交渉の中で必要が生じた場合に限られ、ラフの人々にとっては本当に馴染みある暦法ではない。仏暦の使用は主にタイの役所との関わりの中でのもので、それが非キリスト教徒の経験から遠い暦法である³⁴。

それぞれの「日」([aw₁]nyi)にも十二支名が当てられていて、それらによって正月祭(hk'aw₁ca^hve)、家作り、播種、収穫など重要な行事を行なうための日の吉凶、つまりある日が「よい日」であるか「悪い日」であるかが考慮される。正月祭においては「正月日」(hk'aw₁suh^h)が、また家作り、播種、収穫などにおいてはそれらを開始する日が吉凶の考慮の対象になる³⁵。ある日が何の十二支日であるかを知るためには、現在では、それぞれの日に対応する十二支の動物の図を載せているラフ語のカレンダーに頼る。タイ人は、タイ仏暦および西暦とともに十二支による年も限定的ながら用いる一方、日に十二支を当てはめることをしないので、タイのカレンダーには十二支による年の記述はあっても十二支による日の記述はない³⁶。

人々は月の満ち欠けの動きによって時の経過を、その「ひと回り」によって時の循環を認識している。これに対して、十二支による日の表現は、書かれたカレンダー上の動物の図と日に

ちを表すアラビア数字とを対応させながら、ある特定の日がよい日であるか、何かをするのに相応しい日であるかどうかを知るための方法である。日が12日過ぎるとそれも「ひと回り」であるが、12日間の経過よりはむしろ月の満ち欠けに関係した14～15日間の「ひと回り」の経過によって時間の循環が認識されていた³⁷。十二支による日の認識は、「今何時であるかを知らせるものではなく、今どんな種類の時間であるかを知らせる…点的時間」（ギアーツ 1987: 341-344）である。

伝統派ラフの村における、時間の管理は大人の男性の一部によってなされている。管理者はたいいていの場合、村長、司祭、長老の他、「日を知っている」（aw. nyi shi-ve）と認められている者であり、共同体全体の行事に関するものについては、これらの人々の間の、非公式なロビー活動のような話し合いを含めた合議によって決定される。多くの場合、村長が最終的な決定権をもっているとされるが、最終決定までには公式および非公式に様々な形で話し合いが持たれ、いろいろな人達が前例を挙げながら自らの提案をする。日取りを決めることは、村の政治の中で重要な意味をもつ³⁸。書かれ印刷されたカレンダーは、多くの場合、伝統派ラフの人々がある行事を行うための特定の日を単純に指し示してしてくれる訳ではない³⁹。伝統派ラフにおいては、行事の多くはそれらが行われるべき時期の幅の中にあるかどうかばかりではなく、それらを行う日の吉凶やふさわしさが考慮の対象となる。そのためには書かれ印刷されたカレンダーを、特定の日の月の満ち欠けの具合や十二支における日を知るためなどに用いるが、これらの情報は日取り決定に参加する人々によって様々に解釈されることになる。カレンダー自体が行事の日取りを厳格に規定するのではなく、人々が時間を解釈しそれに意味を与えるために参照するものとして用いられるのである⁴⁰。

その一方で、女性と子供を含む村の大多数の人々は、村内の時間の運営とそれをめぐる政治の場から離れたところにいる。彼らの多くは自分の家にカレンダーを持たず、持っている者もその写真をむしろ飾りとして掛けている。彼らの多くはアラビア数字を読むことが出来ず、播種や収穫を開始するのに相応しい日については、村内の「日を知っている」者に相談する。彼らは細かい時間の経過や今日が何日であるかについて積極的な関心を持たず、月の満ち欠けと季節から大まかな時の経過と循環とを感じて暮らしている。このように村の大多数の人々が正確な暦日を知る技能をもたず、少数の人々に時間の運営が独占されていることで、行事などの時間が、運営者の考えによってより柔軟に、場合によっては、恣意的に決められる余地が残されている⁴¹。

3. キリスト教徒ラフにおける時間

キリスト教徒ラフの時間運営は主に現行の西洋暦つまりグレゴリオ暦に基づいている⁴²。カレンダーは誰か外部のものによって作られ印刷されたもので、普通のラフ人はその製作自体に

は関わることなく、それを使用することによって時間を知らされるだけである。そこには、時間の運営という営為の中で自分達の記憶や自然観察を用いている場合とは、ある意味で全く違った時間との関わり方がある。時間は、より非人間的な現実性をもって、ラフの人々の外側に外在的・客観的に存在するものとなり、時間を計るために行なわれた記憶の行使や自然観察などの主体的な活動は周縁化されてしまう。時間は自ら計るものでなく、どこか知らないところで他人が作り、他人から与えられる暦を見て、ただ知るべきものとなっている。

北タイに居住するキリスト教徒ラフの人々が使うカレンダーの大部分は、タイ語およびラフ語のものである⁴³。ラフ語のカレンダーには、英語とミャンマー語が併記されている⁴⁴。

キリスト教徒ラフの子供を除く大部分は、近年にミャンマーから移住してきた人達であるため、タイ語の識字技能は低い。しかし大部分の人が、書くことは得意でなくとも、少なくともアラビア数字を読むことが出来る識字技能をもっている。キリスト教徒ラフの間で用いられる、キリスト教宣教師の案出によるラフ語のローマ字表記法では、数字にはアラビア数字が使われる⁴⁵。彼らがタイのカレンダーを使うときに読んでいるのは、ある特定の日为何日であるか、つまりその日が当該の月の中で何日目であるかを示すアラビア数字である。タイのカレンダーの多くが曜日名をアラビア数字を含まないタイ語で表記しているため⁴⁶、彼らがこれらを読むことは少ない。しかし、タイのカレンダーは各月を7列×4行⁴⁷（曜日ひとつにつき一列、一週間を一行とする）の方眼図形として示しているため、特定の日を示すアラビア数字の書かれた罫目が、その行の中で端から幾つ目の罫に当たるかを数えることによって、正確な曜日が分かる。また多くのカレンダーでは、日曜日および祝日は特に赤色などで示されているので、日曜日からどれくらいの距離にあるかを目測すれば、当該日のおおよその曜日を知ることが出来る⁴⁸。

ラフ語のカレンダーでは、日にはそれぞれそれに付随した十二支の動物のマークがついているが、キリスト教徒ラフ人はこれらには関心を示さない。現地調査中にキリスト教徒ラフが十二支によって特定の日の吉凶を占うことはなかった。伝統派ラフにしばしば見られる、誕生日の十二支動物名に基づく新生児の命名も、キリスト教徒ラフの間では現在殆ど行われていない⁴⁹。日に付随する十二支に比べると、年に付随する十二支名はまだよく知られているが、それによってある年の吉凶などを占うことはない。普及しているラフ語のカレンダーの製作者の殆どはキリスト教徒ラフ人であるが、多くはミャンマーの「ラフ文化協会」というキリスト教徒を母体としたグループ⁵⁰が作るカレンダーの形式を踏襲している。ラフ語カレンダーはその年に付随する十二支を示している他、各日の罫の中には動物の図が書かれてその日の十二支を示している。しかし、これらはキリスト教徒ラフの人々がこれらの情報を欲しているためというよりも、カレンダー製作者のキリスト教徒ラフ人が、彼らにとってはもはや過去の習慣となった十二支日を「ラフの伝統文化」として客体化し、部屋の壁の装飾という意味合いも大きいカレンダーの上に提示した結果だといえる⁵¹。キリスト教徒ラフの間におけるラフ語のカレンダー

の使用は、ある特定の日が何年の何月何日何曜日に当たるかを知ることにはほぼ限定されている。

ラフの村で見かけるタイ語のカレンダーの殆どは、大きな写真と商店の広告などを載せたものの下に、各月を一枚の紙に 7×4 の方眼図形として印刷したものを重ねて綴じた月めくり式のものである。多くの家庭では一月が終る毎に、一枚ずつめくって、洗濯バサミや切り目を入れた竹片などで上方に留めてゆくが、破って捨てていくことは少ない⁵²。

カレンダーは、それに付いている大きな写真故に、ポスターの代わりとして部屋の飾りに用いられている。そのため、ひとつの家には幾つものカレンダーが壁に掛けてあるし、前年や前々年やさらに数年前のカレンダーも、それらの実用的な用途とは別に、捨てられずに掛かったままになっている。また家によっては、壁に掛けられているその年のカレンダーでも、何ヶ月も月がめくられないままになっているものもある。カレンダーでも古いものは月めくりの部分はずして写真の部分のみを部屋の壁にかけてこともあり、また大きくきれいな写真を載せた古新聞がカレンダーとともに壁に貼られていることもよく見られることである。カレンダーは時間を知るためだけのものではなく、特にお金を払って家の飾りを買う余裕のないラフの間では装飾面で大きな用途をもっている。

キリスト教徒ラフの間では七曜日制の日曜日が戒日 (shin[~]nyi) になっている。キリスト教トラフにとって、戒日の語義は知らずとも、確かで当然とされていることは、戒日とは安息すべき日であり、その日に安息しないとは「罪を背負う」「罪をもつ」(ven[~]ba[~]p[~]fuh[~]ve/ven[~]ba[~]caw,ve) ことになるということである⁵³。戒日に労働するものは、他の村人から非難されたり陰口を言われたりする⁵⁴。日曜日には人々は教会に行って礼拝すべきものとされている。現在、北タイのキリスト教徒ラフ社会においては、各村が村の教会をもつことによりひとつの教区を構成している⁵⁵。実際の出席者数はまちまちであるが、日曜日にはこの村の教会で 4 回もの礼拝が催される。各回の礼拝の前には鐘 (bo lo k'o、しばしば古いタイヤの金属フレーム部分を流用したもの) が鳴らされ、その音は村中に響き渡る。鐘の音を聞いて参加者達はゆっくりと教会に向かうことになる。日曜日の教会の鐘の音が響く空間は、キリスト教徒ラフ的な空間である。

戒日である日曜日が終わると、月曜日から土曜日まではそれぞれ「戒が終って 1 日」(shin[~]peu, te[~]nyi)、「戒が終って 2 日」(shin[~]peu, nyi[~]nyi) …… 「戒が終って 6 日」(shin[~]peu, hk'aw, nyi) という具合に戒日からの距離で表現される。日常会話の中ではしばしば単に「1 日」(te[~]nyi)、「2 日」(nyi[~]nyi) …… 「6 日」(hkaw, nyi) と言われる⁵⁶。一週間の中での日々の経過は、戒日が終ると毎日ひとつずつ増えてゆく数字によって表現され、次の戒日が来ると日の勘定は最初に戻る。

一週間は te[~]shin[~]と呼ばれるが、この言葉は、正確に 7 日からなる七曜日制の一週間だけを指す。これは、伝統派ラフが彼らの戒日の翌日から次の戒日までを「ひと回り」(te[~]jaw) という普通名詞的な言葉で指すのとは対照的である。Te[~]jaw は、十二支の日が一巡する 12 日間の他にも、「ひと回り」という意味で、状況によって様々な時間的・空間的な循環をも意味することが

できるラフ語表現である。Te^ˈshin^ˈ がわずかの曖昧さもなく「一週間」のみを意味するというところにも、キリスト教徒ラフの暦法における、時が人間の外側に非人間的に独立して存在し、人々の生活を外部から規定する絶対的な性格を見ることが出来る。

各月は英語語源の名称によってそれぞれ Ja^ˈna^ˈva^ˈri^ˈ、Fe^ˈba^ˈra^ˈri^ˈ、Ma^ˈchi^ˈなどと呼ばれる。しかし、日常会話では同時に「1月」ha pa te^ˈma、「2月」ha pa nyi^ˈma、「3月」ha pa sheh^ˈma という表現も頻繁に用いられる。後者の表現は一年の時間の循環性を含意し、月はひと月毎に数を増してゆき12月に最高となり、翌年の一月には最初に戻り1から数えなおされる。

年は西暦により数えられ、一年毎にその絶対数を増やしてゆき、循環の観念は殆どない⁵⁷。タイ仏暦の使用は、政府の役人や北タイ人との交渉に関する場合にほぼ限られる。筆者が現地調査中にインタビューしたときにも、筆者の思考様式に合わせようとする努力もあったのだろうが、多くの村人が当時の自分の年齢や当該年の十二支によってではなく、西暦年を使って答えた。しかし、伝統派ラフと同様に、彼らの多くは自分の誕生年と誕生日を知らない。それでも興味深いことに、筆者が年齢を尋ねると、「ラフは年を知らない」(La^ˈHu^ˈaw^ˈhk^ˈaw^ˈma^ˈshi^ˈ.)とか「ラフはカレンダーを知らない」(La^ˈHu^ˈha pa li^ˈma^ˈshi^ˈ.)という答えが聞かれた。この形式の陳述はラフの「自嘲の語り」(Nishimoto 2000)に属する。西暦に馴染みのない村人でも、西暦と書かれたカレンダーの存在について知らないものはなく、それらのもつ権威を意識しているのである。

キリスト教徒ラフにおける重要な年中行事は、正月祭(hk^ˈaw^ˈca^ˈve「年を食べる」)、新米祭(ca^ˈsuh^ˈaw^ˈca^ˈve「新米ご飯を食べる」)、クリスマス(Hkri^ˈsuh^ˈma^ˈ)である。キリスト教徒ラフの大部分がグレゴリオ暦の1月1日から正月祭を始め、8日から12日間程の正月祭を過す⁵⁸。新米祭はどこでも1日間だけ行なわれるが、その期日は村によって異なる。しかし、多くの村は米の刈入れの終わった時期である10月か11月のうちから1日を選んで行ない、大部分の村が土曜日を、そうでなければ金曜日を選ぶ⁵⁹。この日に教会では村人が収穫の一部を持ち寄って特別の礼拝を行なうが、しばしばチェンマイ市や他の村から教会組織で働くVIPや正式に任命された高位の牧師が招かれて特別の説教を行なう。また、新米祭にはあらかじめ近隣のキリスト教徒ラフ村からコーラス合唱隊が招待されていることが多い。クリスマス関連の行事は早い所では1ヶ月近く前から始められる。村によっては早くも11月30日の夜に特別礼拝を行ない、深夜12時が過ぎたところで用意した鶏雑炊をみんなで食べて「クリスマスの月を迎える」

(Hkri^ˈsuh^ˈma^ˈha pa ha^ˈyu^ˈve)と呼ばれる行事を行なうが、これは降臨節(アドベント)に当たるものである。12月に入ると、クリスマスの1~2週間前頃から村人は子供達を中心に聖歌隊を結成して、村内や他の村を歌を歌いながらお金やお菓子をせびってまわる。しかし行事の頂点は12月(24日でなく)25日の夜に教会で行なわれるクリスマス特別礼拝である。このように、キリスト教徒ラフの主要な3つの年中行事のうち、正月祭とクリスマスとは1月1日と12月25日という、グレゴリオ暦のカレンダーによって正確に規定された日を基準として決められ

た期間に行なわれる。新米祭はこの点で、カレンダーによって規定された期日を基準とするものではないが、ある一定の範囲の時期の中から、特定の日の吉凶に基づいてではなく、米の収穫の進み具合、他村の執行日、人々の参加の便宜（土曜日または金曜日に行なうこと）などを勘案しながら決められる。この場合のカレンダーの使用も、ある特定の日が「どんな種類の日であるか」を知るためというよりも、一定の時間の範囲の中で「都合の良いのはどの日か」を知るためのものである。

これらの3つに次いで重要なのは復活祭（Ye. su^h tai. hk'aw. ve aw. nyi）、母の日（aw. e aw. nyi）、父の日（aw. pa aw. nyi）である。復活祭の特別礼拝は春分後の満月直後の日曜日に行なわれる⁶⁰。母の日と父の日（タイの国王と王妃の誕生日で、調査当時にはそれぞれ8月12日と12月5日だった）は、最も近い日曜日に、教会での特別の礼拝によって祝われる。この3つの年中行事のいずれも、カレンダーに記された特定の祝日あるいはそれに近接した日曜日に執り行われる。

新米祭を除くと、伝統派ラフに比べて、キリスト教徒ラフでは農耕に関する儀礼は活発でない⁶¹。伝統派ラフの用いる月の満ち欠けを基礎にした暦法と異なり、キリスト教徒ラフが用いる暦は7日（一週間）を単位にするなど、全体的にタイ人の用いる仏暦と同じリズムとテンポを持っている。一方でクリスマスや1月3日以降も続けられるキリスト教徒ラフの正月祭の間は、タイ国の暦では祝日ではないにもかかわらず、子供達は学校に行かない。キリスト教徒ラフの用いている暦は、彼らの生活をタイ社会と同じテンポで規則づけることを可能にする一方で、タイの暦とは違う年中行事を行うことによって、支配的低地民族からラフの民族境界を維持する機能を果たしていると見ることができる。

4. 比較

上のような比較から、伝統派ラフとキリスト教徒ラフの時間秩序および時間観おける違いについて、いくつかの点を指摘出来るだろう。

キリスト教徒ラフにおける時間は主に印刷されたカレンダーによって規定されている。カレンダーが書かれたもの（印刷されたもの）ということは、少なくともアラビア数字が読める程度の識字技能を有する者なら誰でもがそれにアクセスすることが出来ること、更にそれが一部の指導者による恣意的な時間管理を許す余地を小さなものになっていることを意味する。人々は時間の経過を、記憶や自然観察などの人間的な営為を含む行為を通して計るのではなく、自分たち以外の人々によって製作されたカレンダーを読むことによって知らされる。柔軟な時間運営に対して限られた余地しか与えない書かれたカレンダーを使用することによって、キリスト教徒ラフは時間というものをより外部から規定された絶対的なものとして認識する。キリスト教徒ラフにおいて時間はより非人間的なものとして認識されているが、それは時間が、人間の肉体的状態や自然や季節的なリズムによるよりも、多くの部分で絶対的な、書かれたカレンダーによって秩序づけられていることと関係がある。

別稿（Nishimoto 2000）で述べたとおり、キリスト教徒ラフは、過去から現在を経て未来へと到る段階的な発展という歴史観をもっている。キリスト教徒ラフにおいて、かれらが長年にわたってキリスト教会の「開発」・「文明化」政策を経験することによって、過去から現在を経て未来へと到る段階的な発展という歴史観をもつようになったが、このような歴史観の確立のためには、彼らの時間意識の変容が不可欠だったと考えられる。換言すれば、時間を絶対的で外在的に規定されているものとして捉える認識があつてはじめて、ラフ民族の全歴史があたかもあらかじめ規定された運命であるかのように描き出す大きな歴史スキームの確立が可能になったのである。

伝統派ラフは「年」について、ある年が終る毎にまたひとつ「年」が経過していくというよりはむしろ、毎年同じような「年」が繰り返されるものとして認識している。一方で、キリスト教徒ラフが用いるグレゴリオ暦は、一年毎にその絶対年数を増やしてゆくことによって時間が去ってゆく様子を示し、未来へと向かう一直線の流れとしての時間像を人々に提示している。書かれたカレンダーにおいては、12ヶ月が満ちる毎に西暦の絶対年数の数字をひとつ増やすが、そこには各々の年が同じ長さをもつ均質な単位だという認識が含まれている。「進歩というのは相対的な比較に基づく観念であるが故に、すべてを統一的に秩序づける単一の時間尺度が不可欠であり、西暦のシステムはこの必要にこたえうるものである」（関本 1986: 57-58）。西洋カレンダーの採用とそれによる時間の秩序づけは、キリスト教徒ラフに一直線の流れとしての時間認識を刷り込み、彼らの視線をより未来の方へと向けるように作用してきたと考えられる。

現在のキリスト教徒ラフが、キリスト教への改宗前にどのような時間秩序に従っていたかについて知るには、限定されたものであるが、宣教師テルフォードによる古い報告（Telford 1937）がある。それによると、カレンダーや時計に使用および低地社会との交渉の頻繁化をのぞいて、彼らはおおよそ現在の伝統派ラフ達に従っている時間秩序と同様なものに従っていた。タイにおいては中央政府が北部の国境に近い山地民社会の管理と統合に関心を見せはじめるのは1950年代末からであり、それから次々に実施される一連の山地民政策によっても、政府の統治が山地社会に実質的な効果をもち始めたのは1980年代半ば以降である。現在でもタイ政府による統治がラフの生活の根本レベルまで浸透していないことは、キリスト教徒・伝統派にかかわらず、ラフにおいてタイ仏暦が限定的にしか使用されていないことにも示されている。低地諸政体が山地社会に対して長い間基本的に不干渉の態度を取り実質的な支配を及ぼさずにいた一方で、山地民の共同体の中に入り込んで深い影響と変容をもたらすことになったのはキリスト教会であった。キリスト教会は、布教ばかりでなく教育、識字、医療、農業開発などの活動を推し進め、キリスト教徒ラフ社会に深く根を下ろしていった。現在のキリスト教徒における従来の時間秩序から現在のそれへの変容には、タイ政府による国民国家建設の進展や低地のタイ系民族の山地への勢力拡大の影響よりもむしろ、キリスト教会が山地の共同体に対して圧倒的な力で進めてきたキリスト教布教および文明化・開発政策が変化の大きな要因だったといえる。

ラフにおけるキリスト教への改宗は、過去においても現在も、形而上学的な信念に基づいた個人的な選択であるよりも、有力な指導者や長老達の決断に従った集団的なものが殆どである (McGilvary 1912: 324, Telford 1937: 95-96)。改宗は共同体の宗教的実践体系の全体的な代替を伴う。改宗においては従来の儀礼、象徴、宗教的観念などが新しい一セットに取って代わられるが、暦法や時間を秩序づけるやり方もそこに含まれる。決められた戒日に従って安息し持戒することは共同体の慣習を守ることの一部である。実際に、キリスト教宣教師達は初期のラフの改宗希望者達に対して、飲酒や姦淫の禁止とともに、従来の戒日に代わって日曜日を戒日にするように厳しく命じていた (Young 1904)。

コマロフの研究 (Comaroff 1985) などが示しているように、キリスト教は単に宗教的な教えではなく、人々に西洋的近代産業社会の価値観や規律を刷り込む制度という面ももっている。今日のキリスト教徒ラフに見られる時間の秩序や認識の形成には、彼らが長い間キリスト教と関わってきたことが大きく影響している。西洋カレンダーの使用の他にも、キリスト教会が提供したり促進したりした公的教育の経験、書かれたカレンダーによって規定される特定日に基づく年中行事の執行、カレンダーを読んだり日付つきで記録を取ったりすることを可能にする識字技能などが合わさって、非人間的で標準化され外在的に規定されるものとしての時間認識をキリスト教徒ラフに受け容れさせてきたといえる。

もちろん現在のキリスト教徒ラフ人の時間認識は、トムソン (Thompson 1967) が描くイギリスの産業労働者が最後にたどりついたもの程には標準化されたものでも非人格的なものでもない。キリスト教徒ラフの村人の大部分は今でも農業に従事しており、彼らの生活の多くの部分は、いぜんとして自らの身体的な状態や自然に結びついた労働のリズムによって規則づけられている。現在ますます多くなっている賃金労働者の場合も、与えられる賃金に対して割に合わないと思ったり、雨のときには仕事を止めたり変えたりすることが少なくないことから、彼らが自身の労働に対してまだ一定のコントロールを保持していることが分かる。つまり、キリスト教徒ラフは、百年を超えるキリスト教徒としての経験を経ても、西洋近代的な時間秩序を完全に受け容れてしまったわけではない。しかしその一方で、全体的な潮流としては、ゆっくりとではあるが、より標準化され絶対的で外在的に規定されるものとしての時間という方向に、人々の認識は導かれている。

注

¹ タイ山地民ラフとバプテスト派キリスト教の関係については、Nishimoto (2000)、片岡 (2007) などの研究がある。ラフ全般の人類学的研究としては、Walker (2003) がある。

² Mvuh は「天」、「空」を表す語で、気候に関するラフ語表現にはこの mvuh で始まるものが多い。太陽は mvuh nyi と言う。

³ Mvuh law, k'aw の第二音節の law は「十分な；たくさんの」という意味である (Matisoff 1988: 1003)。

⁴ ラフには、命名にはその人物の生れた時間によって Ca, Shaw/Na Shaw, Ca, K'aw/Na K'aw, Ca, Hpeu/Na Hpeu, Ca, Ha/Na Ha, Ca, Hti/Na Hti という名前をつける方法がある。Ca~は男性名に、Na~は女性名につく接頭辞である。但し、ここに挙げた名前のうち Na K'aw は単独で使われることはまれで Na K'aw Lon 「大きな Na K'aw」、Na K'aw Ma [ma は女性名の最後にしばしばつけられる接尾辞で特に意味はない]、Na K'aw Na 「黒い Na K'aw」など3音節の名前として使われることが多い。

また、ルイスとマティソフの辞書はそれぞれ mvuh ha という表現を記載して、mvuh hpeu が夕方（日が暮れてから夜が浅いうちの時間）を意味するのに対して、mvuh ha は夜（既に暗くなって目の見えなくなった時間）を指すとしている（Lewis 1986: 230, Matisoff 1988: 1000）。しかし、筆者は現地調査中に mvuh ha という表現を聞いたことがなく、伝統派ラフにおいて mvuh hpeu, ha という言い方が使われる可能性があるものの、キリスト教徒ラフと伝統派ラフ両方のインフォーマントとも、mvuh ha のみの言い方はしないと答えた。

⁵ 「夜明け」は、村人の説明によると「(周囲が明るくなって)目が少し見え始めた頃 (Meh a ci maw, la hta)」である。

⁶ 言語学者マティソフはこの語が中国語の「下午」(xiawu, 「午後」の意味) から来たのではないかと推測している (Matisoff 1988: 1159)。

⁷ また筆者は「夕暮れ時」(mvuh, vaw, ve) というルイスの辞書に記載された表現 (Lewis 1986: 233) を、キリスト教徒からも非キリスト教徒からも現地調査中に聞くことはなかった。あるキリスト教徒ラフのインフォーマントの説明によると、mvuh vaw, ve はラフ・シェレーの言葉だということであった。

⁸ この表現自体が殆どタイ語そのままの言い方 (bai mong) である。キリスト教徒ラフにおいては、この言い方よりも「昼の一時に」(mvuh law, k'aw te na li hta) という表現がよく使われる。

⁹ 現在では伝統派ラフの男性の多くが腕時計をつけているが、彼らの全員が必ずしも時計を読むことが出来るとは限らない。時計による「識時」の技能にも個人差があり、だいたい何時であるかということしか理解できない人もいれば、分単位で読むことの出来る人もいる。若者を除いて女性が腕時計をしていることは少なく、彼女らの「識時」技能も男性に比べると低い。伝統派ラフの村人が、かつてラフの男は装身のために「銀の腕輪を身につけていたが、今では時計をつけるようになった」と語るように、腕時計の着用は時間を知るという実用的な目的のためだけでなく、装飾の意味合いが大きい。実際に、村の大人の男で腕時計をつけている者は珍しくないが、家に掛け時計や置時計があるのはまれである。

¹⁰ 腕時計の値段は彼らにとって決して安いものではない。筆者の調査当時には村外での一日の賃金労働の労賃がだいたい 80 バーツ (約 240 円) であり、村内のそれは 60 バーツ (約 180 円) であったが、村の者が腕時計を買う場合には、安いと言われるインド・パキスタン系の行商人 (Ka La Na と呼ばれていた) や近くの町の定期市 (ta, la, na あるいは ka na) の腕時計でも 200 から 300 バーツ (600 から 900 円) のものが多いようであった。腕時計の電池が切れた場合の交換には 100 バーツ (300 円) ほどがかかり、また故障の修理には 100 から 300 バーツ (300 から 900 円) が掛かることが多かったが、それでも「時計がなくして時間が分からないと賃労にするとときに困る」という理由から必要なものだと言われることがあった。もっと安価な腕時計としては他にも、プラスチックのフレームで液晶によるデジタル時間表示のものもあり、安いものでは数十パーツから売られていたが、この種類のものは半ばおもちゃのように見られていたためか、村の男が腕につけていることは殆どなかった。装飾品としての時計という観点から見ると、彼らにとってつけているべき時計は、光沢ある金属フレームに丸い文字盤と時針と分針のついたアナログ式のものであった。

¹¹ 自らは殆ど使用することはないとはいえ、タイ語の winathi という言葉およびそれが表わす概念については、多くの者が知っているので、必要な場合にはタイ語から単語を借用して wi, na hti が使われると考えら

れるが、現地調査中に伝統派ラフが秒単位で時間に言及するのを耳にしなかった。一方、キリスト教徒ラフにおける現地調査中、筆者は一度だけ、秒単位の時間が使われるのを聞いた。それは、大晦日の夜の礼拝において、時間が新年の午前0時に移行しようとするときに村牧師が秒単位で時間に言及したときであった。この村牧師はビルマ（現ミャンマー）で教育を受けた者で、「分」と「秒」については、英語からの借用語である *mi, ni* と *se, ko* を用いた。

- ¹² ルイスは *shin⁻nyi* をタイ系言語からの借用語とし、「(赤ラフにとっては) *holy day*」(Lewis 1986: 305) だと説明している。

なお、筆者が話すことのできたラフ・シェレー (Lahu Shehleh) のインフォマントによると、彼らは新月や満月の日でなく「虎日」(*la⁻nyi*) を戒日にしているということであった。ジョーンズは、彼が調査したラフ・シェレー（自称である「黒ラフ」*Black Lahu* として言及されている）が、「虎日」には、軽い仕事を除いて労働を回避すると報告している (Jones 1967: 35)。

- ¹³ 実際にはこれらの戒めを「司祭 (*to bo*) やシャーマン (*ka⁻shaw⁻ma*) (のような聖職者) ならば守るべきもの」と緩やかに理解して、厳密に守っていない者達も多い。しかし、この日には、朝の9時頃と夕方の5時頃に、村の神殿 (*haw⁻yeh*) の脇に設けられた2列の竹のベンチのところで「水の慣習を集める／集め合う」(*i⁻ka⁻li⁻shaw* [*da₂*] *ve* または *i⁻ka⁻li⁻yu*, [*da₂*] *ve*) 行事が行われる。行事を行うべき時間が来ると、人々が集まるように知らせるために、神殿の長太鼓 (*cehn, k'o₂*) が叩かれる。戒日の朝夕に聞こえる長太鼓の音は、人々がはっきりとそう意識していなくとも、彼らに自分達が共同体の時間の中にいることを認識させる機能を果たしているといえる。

- ¹⁴ この「ひと回り」は、状況により、十二支の動物が当てられた日や年が一循環する12日間や12年間にも、戒日の翌日から次の戒日までの14～15日間のことも指すために、固有名詞というよりも一般名詞的性格の強い単語だと考えられる。

- ¹⁵ 仕事、肉食、性行為の禁避が行われるのは戒日のみである。

- ¹⁶ カレンダーには、白丸、黒丸、半円でそれぞれ満月、新月、半月が示されている。月の形を示した図がない場合でも、たいてい仏の図像により仏日が示されており、それらをひとつ飛びにたどれば、伝統派ラフの戒日が分かる。

- ¹⁷ キリスト教徒ラフとは異なり、伝統派ラフがミャンマーで作られたラフ語のカレンダーを使用する例は殆ど見られなかった。

- ¹⁸ 伝統派ラフは、ローマ字によるラフ語の表記を「ラフ文字」(*La⁻Hu. li₂*) ではなく「ムヌの文字」(*Meun⁻Neu⁻li₂*) と呼ぶ傾向がある。伝統派ラフはキリスト教トラフを「ムヌ」(*Meun⁻Neu⁻*) と呼ぶことが多いことを考えると、伝統派ラフはローマ字によるラフ語の標記を、ラフの民族文字ではなく、キリスト教徒ラフという他集団が使っている文字と認識していると言える。

- ¹⁹ 高地になるとマラリアを媒介する蚊がいなくなる。スコット (2019: 第6章) も参照。

- ²⁰ 「赤ムス [赤ラフ、本稿でいう伝統派ラフのこと] の居所はしばしば、山の頂上から下へ坂になった部分から延びる緩やかな斜面部分で、風を遮るものがあり、[他民族達が使う] 山道から離れた場所であるが、これは赤ムスが単独でいるのを好み、訪ねてくる他民族と付き合ったり、他民族を歓迎することを嫌うからである」(Bunchuai 2002 [1963]: 212)。

- ²¹ 例えば、筆者の伝統派ラフの調査村でもすぐ隣にミャンマーから移住してきたキリスト教徒ラフの村があったが、低地での水田耕作への取り組みは概してキリスト教徒ラフの村人達のほうが早かった。

- ²² ヴァン・ロイもまた同様の見解を述べている。キリスト教徒ラフは、その宗教故に、他の伝統派の山地民族から切り離され、新しい焼畑耕作地についての情報も得られないために、移動性が低くなる。キリスト教会が、山地民族の重要な商品作物であるアヘンの生産を禁じているため、キリスト教徒ラフは豚の飼育、

代替作物の生産、工芸、賃金労働に頼らざるを得ない。そのため彼らは低地と近い距離の場所にいなければならない、さらに移動性を失う。教会の政策は、キリスト教徒ラフに民族語のローマ字表記法、印刷物、教育の機会を提供して彼らを山地の伝統的な生活から離れさせると同時に、町の近代的な価値へと近づけるように働く (Van Roy 1971: 79-80)。

²³ 実際に確認することは出来なかったが、タイのカレンダーに頼っている今でも、村によっては、タイの仏日でなくその前日を戒日に当てている場所もあるという話である。

²⁴ またミャンマーで発行されるラフ語のカレンダーでは、白丸と黒丸で示される戒日がタイのラフ語カレンダーのものよりも一日早くなっていた。

²⁵ まれに *dui, peh*, (「8月」、北タイ語の *ducan paet* 由来)、*dui, ka-o* (「9月」、北タイ語の *ducan kao* 由来) 等のラフ語でなく北タイ語を借用した表現で、北タイの太陰暦上の月に言及されることがあったが、ラフ語でなく北タイ語がそのまま使われていることから分かるように、これは村人になじみのある暦法ではない。

²⁶ 「カオシーン」と「オッシーン」とは、年に3度ある「大きな戒」(*shin⁻lon⁻*; 「大祭」ほどの意味)のうち後のふたつである。これらはそれぞれ仏教徒のタイ系民族の暦における入安居と出安居とほぼ同じ時に当たる。*Hkao* が *khao* (入る)、*aw⁻* が *ok* (出る) から来ているように、ラフのこの慣習はタイ系仏教徒の安居から取り入れられたものと考えられる。安居の時期に婚礼などを避けるのは仏教徒のタイ系民族の慣習でもある。

²⁷ 伝統派ラフの年中行事は、「正月祭」を除いては全て直接農耕に関連した儀礼である。

²⁸ 「寒い時間」はだいたい1月から4月の終わりまで、「雨の時間」は雨の降り始める4月の初めから9月頃まで、「日射の時間」は10月から12月頃に当たる。もちろん、年毎の気候の違い、季節の早まりや遅れ具合によって変わる部分が多い。一方で、人々の認識の中で、「寒い季節」から「雨の季節」への移行を印象付ける *sheh⁻kaw⁻ve* (語義: 「砂を盛り上げる」) という儀礼はタイのカレンダーに従って、4月の終わり頃の満月を基準にその前日に行なわれるが、それに続く満月日とその翌日にも、年に3回だけの「大きな戒」(*shin⁻lon⁻*) のひとつとして2日間の「戒」を過す。人々はこの「盛砂祭」(ここでは、畑を焼いた際に虫や小動物を殺生した罪への許しが乞われた後に、神に対してその年の作物の豊穡が乞われる)と「大きな戒」が終わるのを待って、焼畑の米の播種に取りかかる。

²⁹ 伝統派ラフは村によって8日から12日程の期間で「正月祭」(*hk⁻aw⁻, ca⁻ve*)を行なう。正月祭全体は「女正月」(*ya⁻mir⁻ [ka-i ve] hk⁻aw⁻*)と「男正月」(*haw⁻hk⁻a⁻ [pa⁻ve] hk⁻aw⁻*)とに分かれ、それぞれに「旧年日」(*hk⁻a⁻, pi⁻*)や「正月日」(*hk⁻aw⁻, suh⁻nyi*)等がある。「正月祭」をいつ行なうかを決める際に考慮されるのは、女正月の「正月日」および正月祭の最後の2日(「ネの出てゆく[日]」(*ne⁻, taw⁻e ve [aw⁻, nyi]*)), 「人を出てゆく日」(*chaw taw⁻e ve [aw⁻, nyi]*)と呼ばれる)がよい日に当たるかどうかである。

³⁰ 一番遅く正月祭を行なうのはメホンソン県の人々で西暦の3月に行う所も多い。

³¹ 推定40歳代のある男が「童年には洪水が起る」と言ったのが、筆者が調査中に聞いた殆ど唯一の例である。

³² 筆者が続けて「アカがいない場合にはどうするか」と尋ねると、「アカは昔からずっと近くに住んでいたものだ」という答えが返ってくるが多かった。アカとは、ラフと同じく、チベット・ビルマ語系の言語を話す山地少数民族である。

³³ タイ国では日常的には西暦とともにタイ仏暦 (*phutthasakarāt*) が用いられているが、特に政府の公式文書などでは仏暦が使用される。西暦年に543を加えると、タイで用いられている仏暦年が分かる。

³⁴ ラフの生活の中にまだ本当の意味で取り入れられていないことは、その絶対年数がラフ語 (例えば, 2543 = *nyi⁻ hpa⁻ nga⁻ law⁻ch⁻, aw⁻ chi sheh⁻*) によってでなく、2543 = *shaw⁻ hpa⁻ ha⁻, law⁻ch⁻, si⁻, si⁻, sha* という風に、タイ

語をそのまま借用して発音されるところからも窺える。

³⁵ 例えば、正月祭の期日を決めるときには、正月日が「虎日」に当たらないように配慮されるが、「虎日は強く、(人々が) 喧嘩しがちだから」という理由が挙げられる。その他の世帯単位で行う行事については、家長の父母が亡くなって埋葬された十二支日は「悪い日」とされることがある。

³⁶ タイで発行されている中国語のカレンダーには、年と日の十二支名や新月と満月およびタイの仏日が図で表されていて、伝統派ラフでも使っている場合が考えられるが筆者の調査村周辺では使用されていなかった。

³⁷ 月の満ち欠けに従った 14～15 日間で「大きなひと回り」(te^h jaw lon^h)、十二支に従った 12 日間で「小さなひと回り」(te^h jaw eh^h) と説明されたこともあった。

³⁸ 雑談や噂の席ではしばしば、日取りを決めるために発言権をもっているとみなされている他の者の提案に対して、「ラフの伝統と違っている」、「慣習を知らない」などの批判的意見が述べられる。実際には絶えず変化してきており、また個々の状況によってもその適用のやり方には違いがあるにもかかわらず、伝統派ラフの村内の生活において裁判その他の決定事は、つねに「祖先の時代から」「代々伝わってきた」「ラフの伝統／慣習」(La^h Hu^h [ve] aw, li^h) が参照され、根拠とされる。

³⁹ 例えば、現代の日本で (そして現在のキリスト教徒ラフの大部分の村で)、西暦の一月一日が正月日であり、それはカレンダーに明確に書き記されていて動かすことはできないことと異なっている。

⁴⁰ 特定の日が「よい日」であるか「よくない日」であるか、いつに行事を行うべきかを考え計算する能力が、「日を知っている」ことである。「日を知っている」ことはまた「(ラフの) 伝統／慣習に通じている」([La^h Hu^h] aw, li^h shi^h ve) ことを意味し、以前と比して政府による学校教育がかなり普及している現在でも、指導者としての資質として、また村政治の中で発言力をもつための重要な条件のひとつである。「伝統／慣習」(aw, li^h) とはしばしば「前例」の累積または人々がそのように信じているところのものである。

⁴¹ 筆者が聞いた極端な例には、ある生徒寮の管理者であった宗教的指導者 (ta^h la^h) がその日に豚肉を食べたかったために「戒日」を一日ずらしたというものがあつた。この伝聞話が本当かどうかは分からないが、この話をした伝統派ラフの人々が、時間が有力者によって操作可能だと認識されていることに注目すべきであろう。

⁴² その際に普通は、記憶や月の満ち欠けなど自然現象の観察に頼ることは少なく、無料であるいは安価で手に入るタイ語やラフ語のカレンダーを用いる。

⁴³ ミャンマーで作られたミャンマー語やシャン語のカレンダーが、北部タイのキリスト教徒ラフの間で使用されているのを、筆者は現地調査中に見ることはなかった。キリスト教徒ラフの間ではミャンマーのシャン州と北部タイとを行き来して、北部タイのラフの間では、シャン州や中国の製品を売っている行商人が存在するが、彼らが売るカレンダーはミャンマーで作られたラフ語のカレンダーのみで、ミャンマー語、シャン語、中国語のものは売っていなかった。

⁴⁴ 新年の時期には買い物の際に商店から店の広告の入ったタイ語のカレンダーが配られる。ラフ語のカレンダーは、2000 年までは保健衛生関係の NGO が製作した大きな一枚もののカレンダーが配られていたが、2001 年からは月めくり式の有料のもの (30 パーツ＝約 90 円) になった。タイの別の NGO も 2001 年よりラフ語のカレンダーを作り始めたが、これも同型の月めくり式のもので、「活動資金にするため」ひとつ 30 パーツで売られた。この他にもミャンマーから教会および関係団体が作ったラフ語のカレンダーが持ちこまれ、30～50 (90～150 円) パーツで売られている。ミャンマーの民主化運動に関係するラフ団体が作った英語・ミャンマー語・ラフ語を交えて印刷された一枚もののカレンダーは 10～20 パーツ (30～60 円) で売られていた。ミャンマーで作られたラフ語のカレンダーが売られるのは、後述するように、それがラフの民族性を強調した装飾品としての側面をもつからだと考えられる。その一方で、他の言語のカレンダーが

売買されないのは、時間を知るという実目的からすれば、タイで作られたタイ語とラフ語のカレンダーが比較的簡単に無料でまたは安価で手に入るためだといえる。

⁴⁵ このローマ字によるラフ語表記法、あるいはキリスト教徒ラフが「ラフの文字」(La^h Hu^h li^h)と呼ぶところのものは、主に土曜日の朝に開かれる村牧師による「日曜学校」において子供達に教授される。またタイ語のカレンダーにおいても英語や中国語が併記されるものの、タイ数字が用いられるのは殆どの場合表紙に書かれタイ仏暦の部分のみで、各月の日の標示はアラビア数字が一般的である。タイ数字では、0 から 9 までの表記は ๐๑๒๓๔๕๖๗๘๙ となる。官庁の公用文書ではこのタイ数字の使用が義務づけられているが(富田 1990: 1616)、一般での使用は少ない。

⁴⁶ タイ語において曜日は、wan athit (日曜日)、wan can (月曜日)、wan angkhan (火曜日)、wan phut (水曜日)、wan phruhat (木曜日)、wan suk (金曜日)、wan sao (土曜日) という具合に、数字の観念を含まない言葉で表される。また、曜日名は英語や中国語で併記されることも多い。

⁴⁷ 30 日目や 31 日目が第 5 週間目に当たるときには、スペースの都合上 5 列目を作ることなく、当該日を 4 週間目の行に前週の同じ曜日の日と一緒に表示する。以下のようなものである。

日	月	火	水	木	金	土
...
23/30	24	25	26	27	28	29

⁴⁸ タイのカレンダーでは日曜日はふつう週の最初に位置している。

⁴⁹ テルフォードによれば、この命名法はキリスト教改宗前には彼らの間でもよく見られた慣習であったが(Telford 1937)、現在ではキリスト教徒ラフは聖書中の人物名を子供につけることが多い。ラフの伝統的な命名法では、男子は Ca^h、女子は Na^h で始まる。これに続く部分に、子供の生まれた日の十二支名に当たる語を入れたり(例えば Ca^h Fa^hなら「鼠男」である [fa^hは鼠の意])、子供の生まれた時刻(朝、昼、夜、夜明け)に当たる語を入れたり(Na Shaw^hなら「朝子」という意味)する他、長子と末子にはそれぞれ ui^h (「大きい」)、leh (「終わる」「最後」)を続ける命名法などがある。一方当事者に聞いても意味が分からない名前も少なくない。一方でラフ人は一人がひとつ以上の名前を持っていることも稀でない。現在では、政府によるセンサスや国籍給付のための調査が頻繁化したためか、ラフ人も自分の正式名とあだ名とを区別する傾向がある。それでも、人々による呼び名が時間と共に代わっていることによって、特定のラフ人およびその周囲の人が意識するその人の正式名が変化することもしばしば見られることである。

⁵⁰ ラフ語名は “La^h Hu^h Chaw Li^h Va^h Li^h Aw^h Mo^h”。

⁵¹ 実際、ラフ語のカレンダーはキリスト教徒ラフ人自身が「ラフの伝統文化」と考えるものについての表象の舞台となっており、村人の多くもそれらを主に図像面からよろこんで受容している。カレンダーにおいて表象されるラフ的なものには、ラフ文字による表記の他に、ラフの伝統楽器と考えられている瓢箪笙の図柄や、十二支動物の図、民族衣装を着て盛装したラフ人やラフの踊りや年中行事の写真などがある。

⁵² これは、過ぎた月日の分のページをどんどんと破って捨ててゆく社会の人々に比べると、日々が過ぎ去って無くなってゆくものとして捉える感覚が少ないことを示していると考えられる。現在がある月に属しているために、その部分を示すページが見えるようにめくりあげて留めることはするが、それ以前の月は過去となってしまったので、もう用がないという感覚はそれほど強くないのである。

⁵³ ラフ語の shin^hnyi という言葉については、グシャが人間に休むようにと命じた日という説明がなされるのみで、それが指す概念が高い類似性を持ち、また発音の類似性から同一語源を推測させる北タイ語あるいはシャン語の「戒日」wan sin と結びつける者は筆者のインフォーマントにはいなかった。特にフォーマルな質問の形で、教育のある者に聞いても、語源についてはヒントさえ得られなかった。

⁵⁴ 戒日に野良仕事をしたり籾米を精白するために搗いてはならないが、伝統派ラフのように性行為が禁じられている訳ではない。ただし日曜日は教会に行くべき「神聖な」(da, kch, ve) 日であるので、土曜日の夜は夫婦も性行為を避け、また性行為を行う場合も日曜日に教会に行く前に水浴びし衣服を変えて行くべきだという声は聞かれた。伝統派ラフと異なり、キリスト教徒ラフの戒日には、肉食の回避は行われないうばかりか、逆に戒日こそ肉を食べたがる傾向がある。これに関連して、土曜日には川に魚を捕りにゆく人々が見られるが、狩りと同様に魚捕りは、きつい野良仕事とは違った、半ば遊びの気分が支配する楽しい遠出やゲームのようなものとして考えられており、この意味で土曜日には翌日の戒日の気分のいくらかがすでに始まっているように見える。

精米については、ラフは普通、刈り取った稲をその場で脱穀して、籾米の形で米倉などに貯蔵しておき、食べる前日やその日の朝などに杵と臼の形式の足踏み式精米器によって、籾米から白米へ精米する。電動式の近代的な精米機を用いる場合も同様である。日本の場合と異なり、玄米での貯蔵が行われないので、この精米は日本語でいう「籾すり」と「精米」の過程を一度に行うことになる。ラフ語では ca, te, ve (電動式の精米機の場合は ca, shi, ve) と表現される。

⁵⁵ 同時に、各村毎に牧師(正式な按手をへて任命された者でないが、教会によって給料を支給され実質的に牧師の役割を果たしている者で、人々から「先生」sa, la, と呼ばれる)がいることが理想とされるが、人材不足や村内不和などにより欠員のこともある。

⁵⁶ 「戒の始まる日」(shin, ta, nyi) という伝統派ラフがよく用いる表現は、キリスト教徒ラフの人々も聞けば理解するが、彼ら自身が積極的に土曜日をそう呼ぶことは少ない。

⁵⁷ 年が循環性の含意をもって語られる少ない例は、千年王国主義的な文脈で、歴史を千年単位に区分して各時代について語る場合である。

⁵⁸ ただし、中国からビルマ(現ミャンマー)を経てタイに移住してきて今でも中国正月に従う一部のグループもある。その他では、正月祭の準備はすでに 12 月 31 日から始まっている。正月用の餅を搗いたり (aw, hpfu, te, ve)、豚を屠殺する (va, daw, ve) のであるが、伝統派ラフと違って、キリスト教徒ラフはこのふたつの行為を 12 月 31 日に行ない、この日を「旧年」(hk'aw, pi,) と呼ぶ。12 月 31 日が搗米や屠殺を差し控えるべき日曜日に当たる場合には 12 月 30 日が「旧年」となる。しかし、キリスト教徒ラフ人に何日正月祭を行なうかという質問をすると、この「旧年」を数に入れずに答え、「旧年」を正月祭の日数に算入する伝統派ラフと異なる。またキリスト教徒ラフの正月祭には、伝統派ラフのような「女正月」(ya' mi' [ka-i ve] hk'aw,) と「男正月」(haw' hk'a' [pa, ve] hk'aw,) という区分はない。

⁵⁹ 伝統派ラフにおいて新米祭は、稲が実り始めた時期に日を選んで行われる。そのため、稲刈りが殆ど終わった時期に行われるキリスト教徒ラフの新米祭よりは、一月ほど早い時期に行われる。

⁶⁰ キリスト教徒ラフ人の村人と牧師の多くは、自身では各年の復活祭が何日に当たるかを定めるこの暦の規則を知らないために、カレンダーまたは教会組織からの連絡など外部からの情報によって復活祭の日を知る。

⁶¹ 伝統派ラフの sheh' kaw, ve (盛砂祭) のように対応するような、種植えや田植えに先立って神 (G'ui, sha) の豊饒に対する恵みを乞う行事は、キリスト教徒ラフの間では日曜日の昼の定例礼拝の折に種を持ち寄って神に祈りを捧げることである。

文献

- Boon Chuey Srisavasdi (Bunchuai Sisawat) 2002 *Chao Khao nai Thai*. Bangkok: Matichon (Silapa Watthanatham による 1963 年版の復刻版). (タイ語)
- Comaroff, Jean 1985 *Body of Power, Spirit of Resistance: The Culture and History of a South African People*.

- Chicago: University of Chicago Press.
- ギアーツ、C. 1987 「現代のバリにおける『内面的改宗』『文化の解釈学Ⅰ』（吉田禎吾・柳川啓一・中牧弘允・板橋作美訳）岩波書店、pp.291-324（Clifford Geertz 1973 “‘Internal Conversion’ in Contemporary Bali” in *The Interpretation of Cultures*, pp.170-192, New York: Basic Books）.
- Jones, Delmos J. 1967 “Cultural Variation among Six Lahu Villages, Northern Thailand” Unpublished doctoral thesis, Cornell University.
- Kammerer, Cornelia Ann 1990 “Customs and Christian Conversion among Akha Highlanders of Burma and Thailand” *American Ethnologist* 17(2): 277-91.
- Kammerer, Cornelia Ann 1996 “Discarding the Basket: The Reinterpretation of Tradition by Akha Christians of Northern Thailand” *Journal of Southeast Asian Studies* 27(2): 320-333.
- 片岡樹 2007 『タイ山地一神教徒の民族誌: キリスト教徒ラフの国家・民族・文化』風響社.
- Lewis, Paul 1986 *Lahu-English-Thai Dictionary*. Chiang Mai: Thailand Lahu Baptist Convention.
- Matisoff, James A. 1988 *The Dictionary of Lahu*. Berkeley: University of California Press.
- McGilvary, Daniel 1912 *A Half Century among the Siamese and the Lao: An Autobiography*. New York: Fleming H. Revell.
- Nishimoto, Yoichi 2000 *Lahu Narratives of Inferiority: Christianity and Minority in Ethnic Power Relations*. Chiang Rai: Center for Inter-Ethnic Studies, Rajabhat Institute Chiang Rai.
- 関本照夫 1986 「村と国家行事」原洋之介編『東南アジアからの知的冒険ーシンボル・経済・歴史』, pp. 31-68. リプロポート.
- スコット、ジェームズ、C. 2019 『反穀物の人類史：国家誕生のディープヒストリー』（立木勝訳）みずざ書房（James C. Scott 2017 *Against the Grain: A Deep History of the Earliest States*. New Haven and London: Yale University Press.）
- Telford, J. H. 1937 “Animism in Kengtung State” *Journal of the Burma Research Society*, August 1937, Vol.XXVII, Part II: 86-238.
- Thompson, E. P. 1967 “Time, Work-Discipline and Industrial Capitalism” *Past and Present* 38: 56-97.
- 富田竹二郎 1990 『タイ日辞典（改訂版）』養徳社.
- Van Roy, Edward 1971 *Economic Systems of Northern Thailand: Structure and Change*. Ithaca, New York: Cornell University Press.
- Walker, Anthony R. 1975 “The Lahu People: An Introduction” in Anthony R. Walker ed. *Farmers in the Hills: Upland Peoples of North Thailand*, pp.111-126. Penang: Penerbit Universiti Sains Malaysia.
- Walker, Anthony R. 2003 *Merit and the Millennium: Routine and Crisis in the Ritual Lives of the Lahu People*. New Delhi: Hindustan Publishing Corporation.
- Young, William M. 1904 T. S. Barbour への 1904 年 11 月 15 日付の書簡. Missionary Correspondence File: W. M. Young. American Baptist Historical Society, Valley Forge, PA 蔵.

Christianity and the Modern Western Discipline

Transformation of Time Order among the Lahu of Northern Thailand

Yoichi NISHIMOTO[†]

[†] School of Humanities, Kanazawa University, Kakuma, Kanazawa, 920-1192 Japan

E-mail: [†] yoichi@staff.kanazawa-u.ac.jp

Abstract

Religion is sometimes more of a set of customs that people hardly cast reflective eyes upon and act automatically according to rather than a set of religio-philosophical teachings that people choose to believe of their own will. Christian evangelism by powerful Westerners to less powerful non-Western peoples can thus be viewed as the former's spreading, teaching, and imprinting of the modern Western order and discipline on the latter. Based on anthropological fieldwork among the Traditionalist and Christian Lahu in northern Thailand, this paper examines the changes in order and discipline of Christian Lahu as a result of their long-term experience of Baptist Christianity.

Keywords: *Christianity, religious conversion, discipline, Lahu, Thailand*